

聖書には、しばしば兄弟のお話が出てきます。そして、兄は悪くて、弟がいい役を演じることが常です。カインとアベルの話では、兄のささげものは神様に受け入れられず、弟のささげものが受け入れられ、その嫉妬のために、兄は弟を殺すということになります。このほか、エサウとヤコブ、ヤコブの12人の息子たちの内の兄たちと下から2番目のヨセフ。アロンとモーセなどです。どれも弟の方がいい。

新約聖書ではどうでしょうか。有名な放蕩息子の話で、品行方正な兄は、放蕩の限りを尽くした弟を批判しますが、回心した弟を父は優しく迎え入れてくれました。しかし、今日のイエス様のたとえ「二人の息子」の話は、放蕩息子と全く逆の立場のお話でした。めずらしく、兄の方が、「いい役」を演じることになるのです。

私たちが現在読んでいる新共同訳聖書では、兄は父からぶどう園へ行って働くように言われます。彼は最初断ったけれど、心を変えて、出かけます。そして弟は逆に、働くように言われると、承諾するのですが、行きませんでした。

ところが、変な話ですが、これが以前の口語訳ですと、兄は行くと言って、行かなかったけど、弟は嫌だと断ったのに、あとで心を変えて出かけたことになっています。反対の話になっているんです。このようなことになった理由は、口語訳聖書を翻訳する元になったギリシャ語の聖書と、新共同訳や5年前にできた聖書協会共同訳の元になったギリシャ語の聖書の内容が、変更されてしまったからです。

新約聖書は、皆さんご存知のように元々はギリシャ語で書かれています。そして、最初に書かれたものは、今は残っていません。印刷機もない時代でしたから、人々は福音書を手書きで書き写していました。これを写本と言います。多くの人に読んでもらうために写本が書き写されました。何回も書き写されて読み継がれたのですが、書き写す人は、自分の考えで書き直したり、省いたり、書き加えたりすることもあるのです。それで兄がぶどう園に出かける写本もあるし、弟の方が出かける写本もあるのです。

そして、ギリシャ語を見直してわかったことですが、父親は父と書かれていましたが、息子の方は息子とは書かれていません。ふたりの子どもがいた、というだけです。そして、第一の者に言った。とか第二の者に言った。という表現です。父への答えの言葉の形から、ふたりが男であることはわかりますが、兄とか弟という言葉は使われていません。それで、私が想像するのですが、父親は先日のぶどう園の労働者の話のように、労働力を求めて、いろんな人々に声をかけたのではないのでしょうか。一人目が断るので、もう一人にも声をかけた。少なくとも最近のふたつの共同訳ではそう考えるのが自然でしょう。

今日の話は、非常に単純明快な話ですね。

父はぶどう園に働きに行くように、二人の子どもに言います。兄は断ったけど、あとで考え直して働きに行きます。一方弟は、「お父さん、承知しました。」といい返事をするのですが、行きませんでした。

「この二人のうち、どちらが父親の望みどおりにしたか。」というイエス様の質問に対して、答えは、「兄の方です。」ということになります。

この答えをした人というのは、イエス様にいろいろ質問を浴びせる祭司長や民の長老たち、そしてこの章の終わりを見たら、それらの中には、ファリサイ派という、もう一つの別のグループも加わっています。この人たちは、いわばイスラエルの指導者たちです。

イエス様は、このたとえ話をして、この兄というのは「徴税人や娼婦たち」のことであり、今イエス様と話しているイスラエルの指導者たちは、いい返事をしておきながら、働きに行かなかった弟にあたるのだ、という批判をされたわけです。

では、兄に象徴される「徴税人や娼婦たち」と、弟に象徴される「祭司長や民の長老たち、そしてファリサイ派」との違いは何でしょうか。

兄は、父の言いつけを断ったけれど「後で考え直した」ということですね。ユダヤ人たちは、イエス様よりも1300年前、モーセがシナイ山で十戒を授かり、それを基にして、律法を与えられてそれを守っていました。律法に従うことが、父の言いつけを守ることです。このたとえ話では「ぶどう園に働きに行くこと」が、律法に従うことだったわけですね。

徴税人とか娼婦とかは何者でしょうか。「同胞であるユダヤ人を愛する」という律法があるのに、ユダヤ人でありながら、同じユダヤ人に言いがかりをつけて、異邦人であるローマ人のために、高い税金を取り立てる仕事をする。それが徴税人でした。また、「姦淫してはならない。」という律法があるのに、正当な夫婦以外の間で性行為をし、しかも、それによって収入を得ているのが娼婦でした。このような人々は、神様の言いつけを守らず、ぶどう園に働きに行かなかった人々です。

ぶどう園とは、神様が与えてくださったイスラエルの国のことです。そして、徴税人や娼婦たちというのは、神様の作ってくださった国で働かない、と言うよりは、受け入れてもらえなかった、世間の嫌われ者として、排除されていた人々だったのです。

しかし、この人たちは「考え直した」とあります。このままでいいのだろうか、神様に逆らって生きていることに、良心の呵責があったのでしょうか。そして、ルカによる福音書3章では、洗礼者ヨハネの所に徴税人が洗礼を受けるために来て、「先生、わたしたちはどうすればよいのですか」と聞いています。おそらく、同じような気持ちで、徴税人のマタイもイエス様の弟子になったのでしょうか。この人たちは、悔い改めるためにどうしたらいいのか、生き方を問いに来た人々でした。

一方、弟に象徴される「祭司長や民の長老たち、そしてファリサイ派」の人々はどうでしょうか。

この人たちはぶどう園へ働きに行くことを、「お父さん、承知しました。」と言った弟と同じ立場です。行くと答えていながら、実際は出かけなかったのです。この人たちも、「考え直した」人たちだったのでしょうか。私はそうは思えません。少しこの話を冷静に考えてみると、この弟は、最初から行く気はなくて、『返事だけ、いい答えをしていた。』ということではないかと思うのです。こんな、言葉だけいい答えをしておいて、いつもその通りに行動しなければ、父親からの信頼はなくなるだろうと思うのですが、これはたとえ話の中だけの話です。

たとえ話では父親がすぐに息子に言いたいことを言えますが、神殿で働くこれらの人々に、神様は直接には語りかけません。それをいいことに、特権階級にあぐらをかいて、いつも継続的に、言うだけで行動を伴っていない、とイエス様の目からは見えたのだらうと思います。

ルカによる福音書の10章には、有名な『善いサマリア人』の話が出てきますが、隣人愛を説くユダヤ教の祭司やレビ人が、傷ついた人々を見て通り過ぎる話は、イエス様の痛烈な批判でした。

今日の福音書より少し後ですが、イエス様は祭司長たちと同様に批判の対象であるもう一方のグループ、律法学者やファリサイ派の人々のこともこのように批判しています。この人たちも徴税人や娼婦たちを批判していた人々でした。

『それから、イエスは群衆と弟子たちにお話しになった。「律法学者たちやファリサイ派の人々は、モーセの座に着いている。だから、彼らが言うことは、すべて行い、また守りなさい。しかし、彼らの行いは、見倣ってはならない。言うだけで、実行しないからである。彼らは背負いきれない重荷をまとめ、人の肩に載せるが、自分ではそれを動かすために、指一本貸そうともしない。』」(マタイ23:1~3)

イエス様は、これらのユダヤ教の祭司や律法学者たちリーダーが、言うだけで、そこには信仰を伴った行動がないことへの批判をしておられます。

今日の福音書は、「いやです」と断りながら、後で考え直して出かけた兄と、「お父さん、承知しました。」と答えながら出かけなかった弟の話でしたが、私は今回の箇所を改めて考えながら、いろんなものを調べているうちに、兄を褒め、弟を批判するだけではすまない、この話をするイエス様自身のことを考えなければならない、ということに気づかされました。

いろんな聖書解釈や説教を読んでいるうちに、「この二人の息子には、実はもう一人、長男がいたんだ。」という、驚くような説教に出会いました。その長男は、父の言うことを素直に聞き、それを実行する立派な兄だったのです。そして彼は、不出来な弟たちのために、彼らに考えを改めさせようと骨を折り、どちらの弟も父のもとに帰そうと、説得しながら傷つき、倒れていく救い主である兄イエス様が存在することに気づくこと。これがこのたとえ話に隠された、十字架に架けられる直前のイエス様の気持ちだった、のではないかと、という説教でした。

最初に道を踏み違えて、良心の呵責に悩んでいる人たちや、口では偉そうなことを言いながら実行が伴わない人たち。そんな不完全な人間たちを、何とかして神様に素直に仕える者になるように、働いておられるイエス様に目を向けたい。それがイエス様の示された教えだったのではないかと。今日の特権がそれをよく表しているように思えますので、最後にそれを祈ります。

憐れみ深い主よ、どうかみ民を赦し、平安を与え、その罪をことごとく清め、穏やかな心をもって主に仕えさせてください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン